カリおっさん、ヒーローになる

名無しの錬金術師

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カリおっさんがニグレドを使って新生カリおっさんとなったときに要らない部分を切り離したところ、それがヒロアカの世界に流れ着いてしまったお話。

基本亀投稿。

キャラ崩壊と独自解釈に注意してお進み下さい。

現在リアルの方が忙しいため更新停止中です。

目次

カリおっさん、出会う ―― 1
カリおっさん、傷を治す ―― 11
カリおっさん、記者会見に出る ―― 23

カリおっさん、出会う

……あぁ。

暗く深い穹の中。

水の中にズブズブと沈んでいくような感覚に陥る。水なんてありやしないのに。

そう感じているのならばそれは濃密な魔力の渦だろうか。

見上げた視線の先に見えるは、浮かぶ大地に空の蒼。

そして新たな衣装を身に纏いて高らかに新生の口上を叫ぶ自分（オレ様）。

開闢の錬金術師は今まさに、蒼の底に向かって落ち続けていた。

――オレ様は死んだのか？

疑問が浮かぶ。

返される言葉などないことは百も承知だ。仕方なく自問自答して僅か数秒でアンサーに至る。

――いや、死んだってわけじゃねぇか。不要な部分が切り取られたって感じだなコレは。

彼女はこの『場所』よりもずっとずっと遠くに、今の彼女の魂よりも純度が高い同位体が存在していることを感じとっていた。

大方ニグレドを使った最適化の際に必要のない部分が排斥されたんだろう、と推察して思考の海から抜け出す。

――まぁ言うなればココにいるオレ様はある種の子機みたいな存在だな。

でも本体が生きてるなら別に言うことはねぇ、と合理主義な彼女は納得し、もう一度うすぼけてきた穹を眺めた。

――どうせそのうち「この」オレ様は消えちまう。なら、早々に消えてしまおう。子機に本体が引っ張られちゃ、それこそ一大事だ。

若干の名残惜しさとひと握りの寂しさを手に、カリオストロは視界の幕をゆっくりと下ろす。

自分が虚空へ解けていくのを甘んじて受け入れながら。

「グラン、クラリス……」

彼女が零した小さな呟きも、誰に聞かれることもない。

――あん？なんで消えてないんだオレ様。

異変に気づいたのは随分と後である。

魂の欠片だけとなり、精神さえ消えてしまった彼女が『目覚める』という経験をするのは本来ありえないことだ。

何故か触覚も、聴覚も、嗅覚も、ある。

瞼だけは開かない。仕方ないのでペタペタと辺りを触ってみる。
……少なくとも自分は穹の中で絶賛落下中ではない。
土よりもガチガチとした物質で構成されているようで、肌は冷たい感覚を伝えてくる。

――早く辺りを見たいんだが、瞼が重いな……。

瞼だけ石化の魔法でもかけられたのか、その瞳に景色を写すことは叶わない。
ならばと無理やり手で瞼をこじ開けた。若干の痛みはあるが我慢できないことでもない。

その紫の眼に見えるは天を衝く建造物群、不思議な素材の服を着た者達、走る鉄塊に飛ぶ鉄塊、そして何より――

「何だよ、コレは……」

ドラフともエルーンともハーヴィンとも違う。
全員どっかで作られたホムンクルスではないのかと疑いたくなるが、その割には魔力は屁ほどもない。
異形と化した人間達が跋扈する光景を見て、稀代の錬金術師の口元は三日月のように歪んだ。

「どうやら退屈することは、無さそうだな」

思い立ったが吉日だ。
五感がハッキリと感じられるようになると、カリオストロは直ぐに先程までいた路地から近くの歩道に歩みを進めた。
現在の服装は所謂初期ＳＳＲとして登場したときのものだ。
胸元に大きなリボンが付けられたマント、風で吹けばパンチラしそうなミニスカート、頭に三本の棘があるカチューシャを身につけている。

恐らく現実世界ならば彼女は浮きに浮きまくっているだろうが、ここは『個性』というものが浸透した世界。
彼女程度の服装は目立つことはない。
だが彼女は周りの視線を嫌という程集めてしまう。
ちょうど反対側の歩道にいたカップルの片割れがカリオストロに見惚れる。
それを良しとしない隣の女性は彼氏に強烈なビンタをくらわせた。

魅力の魔術を振り撒いているわけではない。
純粋に、ただ純粋に彼女が可愛いのだ。
それもそのはず、この身体の持ち主は何千年にも渡って「どうすれば自分を可愛く魅せられるだろうか」とそんなくだらないことを考えている。
どこをどうすれば人の可愛いと感じる琴線に触れるかなんてものは、悠久の時を生きる彼女にとっては造作もないことだ。
走るフォームや息遣い、視線な動きや表情筋に至るまでありとあらゆる『可愛さ』に手を尽くした彼女を二度見しないということはありえないのである。

「ねぇねぇっ、そこのお　じ　さ　ま　？」
「ムッ！……どうしたんだい？おじさんちょっとビックリしちゃったよ」

カリオストロが目をつけたのは骸骨のように痩せこけた金髪の男性だ。

彼女は錬金術で作った自分好みの美少女の体を現在使用しているわけなのだが、その体の基本性能もしっかりと向上させてある。
これで体の性能がごく一般的な美少女Ａだとしたら、確実に騎空士生活に体がついてこれる筈がない。

騎空士生活をつつがなく過ごすために相手の力量や状態を把握する術はそれなりに取得済みだ。
魔法を行使してもいいのだが、それでは相手に隙を与えてしまう。
なので彼女は自らの目を魔眼として錬金術で作製していた。もちろん魂の乗り換え前にである。
流石の開祖も窮地に追い込まれるようなことがなければ使用中にそんなことはしない。
その目がカリオストロに訴えている。コイツは只者では無いと。
異形と言えば異形かもしれないが、そんなことは問題ではない。
この骸骨男の体に魂が幾つも同居していたのだ。

様々な人間の魂が1つの弱々しい主柱を支えるようにしてこの男の中で組み上がっている有り様、稀代の錬金術師からしてもそれは明らかな異常性を孕んでいた。

――魂喰いか？いや、にしては他の魂がこいつに協力的過ぎるんだが……。

禁じ手・魂喰い。

カリオストロの錬金術よりも後に編み出された『禁忌』とされている魔法。

他者の魂を自らの糧として力を得る、たったそれだけ。

少しのミスで自分の魂が消滅しかねないことはもちろんのこと、魂を喰らう度に自己が薄れてしまうというこの二点が禁忌と評される所以であった。

死後の安息さえ奪うこの魔法は開発されど、実用段階まで至ることはなかった。

最初はその魔法を疑ったがどうにもそれは違うようだ。魂食いは「混ざって」しまうが、この男の中にある魂は「支えて」いる。

渋々支えているのではなく、望んでそうなっているかのように。

真理の探究者たるカリオストロはその在り方に興味を抱いた。だから話しかけたのだ。

「あなたの体にさ……」

おもむろにその男に近づき、完全に計算され尽くした上目遣いをする。

男は「ｏｈ……」とこぼして窪んだ目を少し見開いた。

予想より反応が薄かったためにカリオストロは内心舌打ちしながら次の一手を繰り出す。

――何個の魂があるのかな？

彼にだけ聞こえる声量でカリオストロは言った。

男は「何を言っているんだ」というような表情をした。実際、そう思っているだろう。

だが数秒考えてその意味を咀嚼し理解出来たのか驚愕の表情でバッと彼女に詰め寄った。

「……君は何者かな？」

「私はねぇ、カ　リ　オ　ス　ト　ロだよ。よろしくね？」

トーンを下げて男は尋ねるが、決めポーズまでされて自己紹介をされてしまった。

その明確な目的の見えない様子にこめかみを抑えながら、彼もとりあえず自己紹介をした。

「私の名前は八木俊典だ。カリオストロ少女、君はどこでそのことを？」

「どこ？強いて言うならココだけどぉ……あっ！理由を知りたいってコトかな☆でも、ココでお話しすることじゃない気がするなぁ……」

チラッと一瞥してまた目線を戻す。

「でもこのままだとカリオストロ逃げちゃうかも……」

チラッチラッ。

「もしかしたら今のお話し誰かに言いふらし「分かった分かった、君の誘いに乗るとしよう」うふふ、そう来なくっちゃ？」

「で、なんで私の家なのかね？」
「だって秘密抱えてるなら防犯とかもしっかりしてるんじゃないかな～って☆」

カリオストロがやって来たのは男の家であった。
なんの変哲もない一軒家のようだがカリオストロの目は現エルステ帝国にも勝るとも劣らない技術が使用されていることを見抜いていた。
（これじゃあココになんかありますとか言ってるようなもんじゃねぇか……）

カリオストロは応接間の二人がけソファの真ん中で足をパタパタさせながら彼を待った。
程なくして俊典が入ってくる。特に何かを仕掛けるつもりはないようだ、持ってきた紅茶よりも渋みの強いお茶に毒が混じっているようなことは無い。
「それで、一体何が目的なんだ？私は君と歩いているときにずっと考えていたが全くもって検討がつかない」
怪訝な態度を露わにして俊典は質問する。これにカリオストロはいつものキャピキャピした調子から一転、地の部分である面を表層に出した。
「オレ様の目的……というよりかは興味だな。オレ様はお前の魂の在り方がとても気になる」
俊典はぞわり、と背筋が凍るような感覚を覚えた。
ぶりっ子してるんだろうなぁ、というのはハナからわかっていたがそんなことではない。
形容できないようなおどろおどろしい雰囲気がカリオストロから溢れ出たからだ。
まぁ幼女の身体に男の魂をぶち込んで身体を交換しつつ幾星霜と

寝かせればこんな老獪なオーラを醸し出しても何らおかしくはない。
「魂の在り方？ヴィランとかそういうんじゃなく？」
「ヴィラン？何だよそれ」
「「んん？」」

「なぁんだおじさん脅されちゃってるのかと思ったよ」
「もぉ～ぅ！カリオストロがそんなことするワケないでしょ？」
「ちょっと前の君なら躊躇なくしていた気が「オイ」ＨＡＨＡＨＡ！すまないね」

結論から言えば二人の齟齬は解消した。
俊典は彼女をヴィラン関係で自分の秘密を掴んだものと思っていたが、実際のところカリオストロは彼の魂の在り方に興味があっただけなのだ。
とりあえずカリオストロは別世界からこちらにやって来たことを話すと
「そこまでは想像はつかなかったけど、君は何となく違和感があった」
と信じてくれた。
なるほど人を見る目は確からしい。

とりあえず外見年齢はまだ二桁にも満たない幼女なので対外的には常識を知らない箱入り娘として振る舞うことにした。
先程の地の部分は「たまにポロッと出ちゃうの？アレが地じゃないからね!!」と押し通した。これには俊典も苦笑いである。

その後カリオストロは彼からたどたどしいこの世界の説明を受けた。
とりあえず全て聞いたが結局彼の部屋にあった辞典を見ることでこの世界に対しての理解を深めた。
数年後にとある学び舎で教鞭をとるらしいのだが、そんな調子で大丈夫か？とカリオストロは心配した。

「ところでカリオストロ少女」
「何かなっ？」
カリオストロが俊典の自宅に来たのはお昼頃だったが、すっかり空は黄昏の色に染まっている。
「君、行く宛はあるのかな？」
「ないよっ☆カリオストロは俊典のお家で暮らす予定だったんだけど……あっ！でもでもっ、追い出そうとしたら言いふらしちゃうからね☆」

八方塞がり。俊典はガックリと項垂れた。

カリおっさん、傷を治す

――その少女は不気味だった。

私はヴィランとの戦闘後、トゥルーフォームに戻って自宅へ帰る途中だった。

さすがにこの骸骨男が「平和の象徴」だとは誰も思わないだろう。

トゥルーフォームが「平和の象徴」として私のあるべき姿ではないということは分かっている。

だが皮肉にも私が一個人として私らしくいられるのは、この姿なのだ。

そんな時に彼女が現れた。

彼女はあどけない仕草をしながら歩道を走っており、道行く人の目を引いていた。無論、私の目も。

目を輝かせながら周りを見回すその姿は、どこか世間知らずのような雰囲気を感じる。

ヒーローとしてここいらの案内をしてもいいのかもしれないが、この姿の私ではきっと不審がられるだろう。

申し訳なく思いながら彼女を見ると、彼女もまた私を見ていた。

私の後ろに何かあるのだろうか。多分私を見ているのではないのだろう。

そんなことを思っていると彼女は此方にズンズンと近づいてきた。そして甘ったるい声で「ねぇねぇっ、そこのお　じ　さ　ま　？」と囁いてきた。

いやぁ、ビックリしたね。ビックリした拍子にマッスルフォームになりそうになったよ。頑張って抑えたけど。

「あなたの体にさ……」

そして更に近づいて上目遣いをしてきた。

周りの視線が痛いし、スマホに手をかけている人がいるし、このままだと私お縄にかかっちゃうんじゃないかと気が気でなかった。

そんな周り様子など気にすることもなく、彼女はニッコリと笑った。

「何個の魂があるのかな？」

それを聞いた時に私は「何言ってんの」と極限まで心が素に戻っていた。

だが言ったからには意味があるのだろうと考え直して、私は心当たりを探した。

……まさか、ＯＦＡを知っている!!?

「……君は何者かな？」

震える声で私は問うた。仮にこの少女がヴィランだとすれば、今の私は瞬く間に殺られてしまうだろう。

彼女は先ほどよりも小さく、私にｄ

「おーい。いつまでそれやってんだ？」

私はキーボードを打つ手を止めて声の方へ向き直った。

「仕方ないだろう？この世界での君の身元を保証するための作業だからね。出来れば私もこんな面倒事は抱えたくなかったよ！」

「いいからこっち来てよぉ。秘密ぅ、バラしちゃうぞ☆」

「分かった！分かったから！」

私はカリオストロ少女との邂逅についての報告文を上書き保存してパソコンを閉じた。

私は彼女の身元保証人になることを決めたのだ。いや、決めさせら

れた。私の秘密をチラつかされて脅されたからね！
その他にも今の私では美少女を攫った骸骨男という不名誉な称号を得かねない、という理由もあったが。
塚内君には電話で異世界関連以外の事情を説明したけど……果たしてちゃんと信じてくれただろうか。後でしっかり完成させてｆａｘで送っておこう。

「で、何だいカリオストロ少女？」
「お前の身体、どっか傷んでないか？そうだな、呼吸器系辺り。後胃袋は造りもんだろ」
「？
！！……その目かね？」
カリオストロ少女はふっふーんと上機嫌に笑って「ご明察☆」と囁いた。
さすがの私も耐性がついてきたからかそこまで動揺することはない。
「ちっ、もう少し見惚れてもいーんじゃねぇか？」
「さすがに私も耐性ついていたからね！Ｎｏ．１ヒーローは伊達ではないってことさ！」
「ならＮｏ．１教師にもなれるように努力するんだな」
「う、ぐっ……」
カリオストロ少女と同居してからもう一週間になる。
彼女も心を許してきたのか、本来の性格で話すことが多くなった。
これがいい傾向なのか悪い傾向なのかは私には判断がつかないがね！

それはともかくカリオストロ少女は『錬金術』というものを扱えるそうだ。
以前に「それは君の個性かね？」と聞いたことがあるのだが「個性じゃなくて魔法の一種。私はそれの開祖なんだよ☆」と返事が来た。
仮に開祖だとしてこの少女は一体何年生き続けているのだろうか。

私はとりあえず戯言と受け取ってその場を流したのだが……。

「さすがに見ているカリオストロもそれは痛ましいから治してあげたいんだけどぉ……☆」

「本当かねッ!?」

「うわぁっ!?急にムキムキになるんじゃねぇ!!」

おっと、気が昂ってマッスルフォームになってしまったようだ。カリオストロ少女に謝りながらトゥルーフォームに戻り、事の詳細を聞いた。

「治すのにはオレ様が『キュアポーション』ってものを作る必要がある。ただの外傷ならお前の身体を部分的に再構築すればいいんだが……」

「何か突拍子もないワードが出てきた気がするんだけど」

「放置し過ぎたせいか、それがお前の中で正常な状態になってしまってる。だがポーションを作るにも材料が足りねぇ。そ こ で ね ?」

……彼女の言いたいことは分かった。その材料をどうにかして集めてこい、といったところだろう。

エンデヴァーが見たらなんて言うかなぁ。中身が男とはいえ、見た目美少女に顎で使われてる私のことを。

多分、オリジナルのオレ様ならもっと手早く上手くやれるだろうよ。
どうしてこうも『キュアポーション』ごときに手間取っているのかと言われれば、それはオレ様がオリジナルの断片のような存在だからだ。
ニグレド――賢者の石――を使ったオリジナルの最適化の際に「要らない部分」が発生してしまった。それがオレ様。オリジナルの断片っていう形容はそういう理由からだ。

現在のオレ様は知識はともかく、技量は封印がかかっていた状態に近い。『スペルブック』もオリジナルの方にあるからコッチで一から作らなきゃいけねぇのが辛いところだな。

「で、『キュアポーション』があれば私の内臓も治せると？」
「ああ。呼吸器系はそれで大丈夫だ。胃袋の方はオレ様が錬成したやつを造りもんの代わりにはめ込むつもりだが……なに頭抱えてんだ？せっかく美少女錬金術師のカリオストロがぁ一宿一飯のお礼に身体を治してあげるって言ってるのに☆」
「錬金術、本当に何でも作れるのかい？」
「あったり前だろ？大抵のものは作れるし、この身体もオレ様特製のボディさ！」
「……もしかしなくても開祖っていうのは」
「本当だぜ？まさかとは思うが疑ってたってことは、ないよなぁ？」
当たり前さ、と滝のように汗を流しながら言っても説得力が皆無なんだが……。

その後カリオストロ少女と他愛もない会話をしてから私は床につき、そして朝がきた。なぜだかいつもより調子がいい。
カーテンを開けようと寝ぼけ眼を擦る。すると、ベッドの近くに置いてある小さめの机にカリオストロ少女が突っ伏していた。
ノートがその傍らに落っこちているので夜遅くまで勉強していたのだろう。だが何故私の部屋で？
「んぁ……あぁ、起きたか俊典」
「何故ここに？」
あぁ、と答えて彼女は少し伸びをした。
「キュアポーションの材料がたまたま冷蔵庫にあったからちょっとな」
「……なんて？」
私は自分の身体を見た。あの忌々しい傷跡はすっかりと無くなっており、先程よりも呼吸がしやすいという実感が持てた。本当に治っているのだ。
「私に投与したのかね!?」
「いやー悪い悪い。自分でちょっと実験したから効能は間違いないと思ってくぎゅっ!!痛てぇじゃねぇか！」
私はマッスルフォームになって超弱めにデコピンをしていた。確かに彼女がやったことは人助けだし、私自身感謝すべきことだろう。だがね？
「これからは許可を取るように」
「……分かったよ」

～更にまた数日後～

「塚内君、この後時間取れる？それとこの前のｆａｘで送ったやつの手続きの代行をお願いしたいんだけど――」

俊典が誰かと電話をしている。確か携帯……じゃなかった、スマートフォンってやつだったか。魔法も使わずに遠方会話を実現するとぁこの世界の人間も侮れねぇな。

もしかしたら『個性』の代わりに魔力を失ったのかもしれねぇが……まっ、今は考えるだけ詮無きことか。

「カリオストロ少女、出かけるぞ！」

「いいぜ、オレ様も出かけたいとこだったんだ。それで、どこ行くんだ？」

「警視庁」

「……ハァ!?」

「最初にｆａｘもらった時は君を逮捕しなきゃいけないかなって思っちゃったよ？」
「ＨＡＨＡＨＡ！すまない、実の所、私も困惑しているからね」
今オレ様がいるのは警視庁の応接室だ。俊典とオレ様が二人がけのソファに座って、机を挟んで正面に塚内直正って警部がいる。
俊典はオレ様の事を塚内に「『個性』が『錬金術』の記憶喪失の少女が路頭に迷っていた」と説明したらしい。すごく無理やりな説明だと思ったが塚内は「そうかい。そりゃあ大変だったね」と流したそうだ。
「ま、裏があるような気はしないでもないけど君に限って後ろめたい事はしないはずだ。なんてったって『平和の象徴』だからね。特に根掘り葉掘りは聞かないでおくよ。後、処理が面倒くさそうなのもあるけど」
「助かるよ！あ、後これもよろしくお願いしていいかな？」
俊典は持ってきた鞄からファイルを１つ取り出して机に置いた。
「ああ、ｆａｘのやつね。いいとも。そこまでめんどくさくないし。というか君がこういう手続きが下手なのは僕はよーく知ってる」
「いつもすまないね」
塚内がファイル中のプリントを出した。んー、なになに？「養子縁組届」……？
「オイ俊典、どういうことだ!!」
襟元を掴んでオレ様は俊典に凄んだ。まぁまぁ落ち着いて……？落ち着いてられるか!?どうしてお前とオレ様がお前の養子にならなきゃいけねぇんだよ!!身元保証人になって☆とは言ったが養子になるとは言ってねぇよ!!
「愉快なお子さんですねぇ」
「だろう？」
「いつオレ様が許可したんだ!!」
「だってこのままだと私も君もお縄にかかることになるぜ？なにせ不法滞在に誘拐犯（仮）だからね！身元保証人というよりかは養子になった方が探りを入れられる確率は低くなるんじゃないかな？」

塚内によれば「カリオストロ」と呼ばれる少女の戸籍はどこにも存在せず、また『錬金術』という個性も日本の戸籍を洗ってみたがこれまたヒットしなかった。
そんな彼女を警察が発見すればどうなるか？即逮捕とはならないだろうが、とりあえず事情聴取をされるなりなんなりと面倒なことが山盛りだ。だからこうしたというのだ。
「まぁついでに君への意趣返しというのもあるんだけどね。ＨＡＨＡＨＡ!!」
してやったり、と俊典は勝ち誇っている。クソっ！オレ様としたことが……しかしこのままではオレ様は面倒な手続きを踏んで警察監視の元に動かなきゃならねぇ。
仕方なくオレ様は了承した。

その後名前が「八木　カリオストロ」では恐ろしく語感が悪いというオレ様たっての希望でとりあえずこの国に即した名前にすることにした。
そういえばいつの間にかオレ様言語能力備わってたんだよな……。
「……開理（かいり）　錬呼（れんこ）　、でいいか」
「やっぱり『錬』は付けるんだね」
「この世界では名が個性を表してるみたいだからな。オレ様もそれに則ってみただけだ。まぁ私、開祖だし☆」

「で、私はなんで買い物に付き合わされているのだね？」
「私が可愛くなるためだよっ☆」
　私は塚内君の元で本人署名が必要な書類だけを片付けた後、カリオストロ少女と共にショッピングに来ていた。
　現在時刻は夕方五時。私はマッスルフォーム（カリオストロ少女たってのお願い）で彼女の服選びに付き合わせれているわけなのだが……視線が痛い。
「開理少女、これいつ終わるんだい？」
「違うよおじ様。カ　リ　オ　ス　ト　ロ、でしょ？」
「シーっ!!おじ様なんて呼ぶんじゃありません!!」
「ん～……じゃあパパ？」

　ニコッと微笑んだカリオストロ少女。私は不意に父性に目覚めそうになった。まだ結婚してすらいないというのに。
　あぁ、待て待つんだカリオストロ少女。そんな蠱惑的な瞳をコッチに向けないでくれ!!誘惑に負けてしまう！
　確かに私は君の養父になった！けど、断じて「カリオストロ少女超絶可愛い♡」とか思ったからじゃない。

　彼女に対するほんの意趣返しだ！下心なんてどこにもないぞ！本当だ！

　まずいな、このままでは彼女のペースに飲まれてしまう……。私は『平和の象徴』なのだ!!
　この程度の試練、いくらでも乗り越えてきたじゃないか。そうだ、思い出せ！思い出すんだ!!

グラントリノにしごかれ、血反吐を拭ったあの時を！

お師匠と共に駆け抜けたあの日々を！

後輩達から向けられた羨望の眼差s「パパぁ、どうしたの？さっきからカリオストロの声を無視してさ」

涙に濡れ、アメジストのようにキラキラと輝いた目が私のハートを捉えた。

「もしかして、カリオストロの事嫌いになっちゃったの？うぅ、しょんなぁ……☆」

後にオールマイトは取材でこう述べる。

――私の父性はもう、限界だったのだ。

「よぉ～し!!パパ、カリオストロのために張り切っちゃうぞぉ!!」

「わぁ～い☆パパ大好き～!!」

――次の日のマスメディアはオールマイトの隠し子で持ち切りになったことは言うまでもないだろう。

カリおっさん、記者会見に出る

「働かざるもの食うべからず、そう私は思うんだ」
「カリオストロはパパの扶養対象じゃないの？」
「扶養対象とか父をパパって呼ぶ娘からは出てこない言葉だと思うんだけどなぁ!!」

あの事件は瞬く間に世間に広がった。オールマイトの事務所にはひっきりなしに電話が鳴り響き、週刊誌やワイドショーではＳＮＳに投稿されたオールマイトと謎の美少女のショッピングの一部始終がこれでもかと使用された。
「パパ？」という発言があったことをブティックの店員が明らかにするとそのニュースは更なる盛り上がりを見せる。
事務所が「本人に確認出来次第、マスコミ各社に公表します」と発表するも、最早その火を消すことは叶わなかった。
塚内警部に大目玉を食らった２人はこの事態をどうにか収めようと考えているのだが……。

「カリオストロお家に居たい～！」
「君の巻いた種だぞぉ!!」

何時間経っても平行線を辿っていた。
とりあえず事務所には『記憶喪失の子どもを拾って厳正な警察の審査の後、自分の養子となることになった』という趣旨の文を送っておいてはいるが、たったこれだけでマスコミが満足するとは到底思えない。
記者会見でもするかなぁ、とオールマイトはぼんやりと想像した。別に悪いことは何もしていないんだけど、そう考えるだけでやる気がみるみるうちに失せていく。
平和の象徴と言えど、出来るだけ面倒事は避けて通りたいのだ。

「記者会見……します？」と事務所に連絡したところ「自分が必要だと思うなら、した方がいいんじゃないですかね」と素っ気ない返事が来た。これでは暗に「やれ」と指示されたようなものじゃないかと頭を抱えた。

さすがに自分だけだとテンパっちゃうのと、このままでは事務所運営にも支障が出るのとでカリオストロも一緒に出ない？と話したが前述の有様である。

「いまちょうどいいとこだから！研究がいい感じなところなの！」
「その費用は私のポケットマネーから出てるんだぞ？今後の仕事に支障が出るとカリオストロ少女が使えるお金も減っていくからね？」
「むっ、それは……う～ん」

よし、もう一押しだ！俊典の直感はそう切に訴えた。

ここで彼は今までに見聞きした知識を総動員してカリオストロを巻き込みにかかる。

「もしカリオストロ少女が記者会見に出たら…君の可愛さが全国区に広がるぜ？」
「やる。やらせろ!!」

このワードを出せば即決だったのかもしれない。

？

フラッシュが焚かれる中、筋骨隆々が形を為したヒーローが登壇する。

チラりとやって来た方向を確認すると、ひとつ咳込んで席に着いた。

「この度初めて記者会見をする運びとなりました。プロヒーローのオールマイトです」
「今回私が記者会見の場を設けさせて頂いたのは他でもありません。私が何か世間体的にマズイことをした訳ではなく、この少女についてです」

オールマイトから見て左側の壁に1人の少女の画像が映し出される。記者達はその可憐さに息を呑み、カメラマン達はシャッターを押す指の速度を上げる。
美の極致に至ったかのような風貌の少女とオールマイトの関係は一体何なのだろうか。会場にいる全員がオールマイトの二の句を今か今かと待ち構える。

「この少女と私がショッピングをしていた所を目撃され、世間をお騒がせしたことを謹んでお詫び申し上げます」

まずオールマイトは謝罪をした。
Ｎｏ．１ヒーローと言えどもそういった面にも注意を払わなければならない、そう思ったからだ。
実際は世間が勝手に騒ぎ立てただけなのだが……。

「現在マスコミ各社や週刊誌等で色々な報道がなされておりますが、今のところ正解に辿り着いたところはありませんね。でも私の口から聴くより、皆さんは期待しているものがあるんじゃないでしょうか？」
オールマイトの笑顔はいつものアメコミタッチなままなのだが、どこかおおらかな父性に溢れているように感じられた。
おもむろに彼は巨体に似合わぬ可愛い仕草で「おいでおいで」と自分が会場に出てきた場所に向かって手招きする。
すると、タタタっと軽快な足音が鳴り響きオールマイトの目の前で

ピタッと止まった。
テーブルがオールマイトの身長に合わせて作られているため、一瞬姿が見えたがまた消えてしまう。
ぴょんぴょんとジャンプをしているのか、カチューシャみたいなものが机の下から飛び出てくる。

「紹介しましょう」
踏み台をズリズリと引きずる音の後、ぴょこんと画面の中にいたはずの少女がその姿を表す。
「私の養子の開理　錬呼　少女です」

その後は質問攻めの嵐だった。
まさかまさかのご本人が登場するとは天下のマスコミでも予想が出来なかったようだ。
ここからはダイジェストでカリオストロとオールマイトに投げかけられた質問を紹介していこう。

Q．オールマイト氏とはどのような関係？
A．養子。錬呼が危ないところを助けてもらったんだぁ☆

Q．開理氏の御家族は？
A．彼女はヴィランに襲われた際にショックで記憶喪失になって

おり、そこを私が保護した為御家族の詳細は不明です。
御家族がいらっしゃれば本人同意の元で直ぐにでも。

Q．何故養子に？
A．私がこの街にいるにも関わらずこの様ないたいけな少女をヴィランの脅威に晒してしまい、それが記憶喪失を招いてしまった。
これは私自身の失態であり、責任を取ろうと思った次第です。

Q．オールマイト氏についてはどのように思っていますか？
A．う～ん。一概には言えないけどね……。優しくて、ぶきっちょで、ほっとけない、優しいパパだよ！
錬呼のこと助けてくれたから、私はしっかり恩返しをしないとね☆

Q．オールマイト氏の普段のご様子は？
A．えっと、たまに私が朝を起きるのを手伝ったり、たどたどしく料理に挑戦してるのを手伝ったり……後は……。
この質問はオールマイトが途中でカリオストロの口に手を被せたために中途半端になった。
超越者然としたオールマイトだったが、カリオストロの暴露によって彼女が安心出来るように頑張って努力していることが明らかになった。
完璧超人でも手こずることはある。そんなオールマイトの新たな側面は彼の人気の灯火にガソリンを注ぎ込んだのであった。

「そこまで言うなんて聞いてないぞカリオストロ少女」
「ごめんねパパ……許してぇ☆」
「……仕方ないなぁ!!」

このカリオストロがオリジナルと違う部分があるとすればそれは「甘さ」だろう。
知識や技術（封印中レベルだが）はオリジナル並だが、この彼女にはオリジナルのような残酷性は鳴りをひそめている。
それはオリジナルが不要な部分として少量の甘さを切り捨てたことによる影響なのだが……。